

2010年猛暑の都会から避暑？して、クーラー不要、標高1250mの苗名小屋での解体業と土方業

\* 苗名小屋床板張替え工事の事前調査、腐食進行の原因追求、とりうる対策の実施\*

8月13日～16日 (参加者: 8期/佐木、9期/鈴木、11期/安藤、12期/榎本、23期/高岡、29期/松本、30期/笹倉、34期/親跡)



01 左から、高岡さん、榎本さん



02 左から、榎本さん、佐木さん



03 左から、笹倉さん、榎本さん、高岡さん、佐木さん



04 床を剥がしたら土間は意外とサラサラ、穴を掘ったら土の湿度を色変化で観察すると差異がないことを確認した



05 剥がした部分の、大引きの腐り状態 (まだ序の口のレベル) 白い黴が垂直の支柱全体を覆い尽くしている！！



06 小屋全体を支えている主柱4本の1本、基礎との接合状態

床板2坪分を剥がして外観し、且つ、外側の基礎部分の観察（後述）で判ったこと：

- ① 正方形の床部分を四分割して考えると、西北の四分の一の部分が傷んでいる。（床板撤去後の目視）
- ② その西北部分の東側には大引きと床板との隙間（根太の高さ）があり、通風の存在を観察した。
- ③ その西北部分の大引きの腐食程度は、東側から西に向かう程、又北側に向う程凄くなっている。
- ④ 腐食は、まず白色の黴が根太(ネタ)や大引きの表面を覆い尽くし、その後材木の栄養分を吸収してそれを進行させている。黴の種類は不明であり、知識ある何方の見解を求む。（写真05参照）
- ⑤ 湿気は、土間からの垂直方向の呼び込みと、雪が最後まで残り陽当たりの悪い北側からのブロック材の吸湿による水分呼び込みとが考えられる。前者を確認すべく穴掘り実施。（写真04参照）
- ⑥ 柱構造などを外観すると、それは完全に腐っており、アンカーボルトが入っている西北部の基礎の交換は、専門家大工さんに依頼すべきではとの結論を得た。つまり自分たちの施工では困難と見る。
- ⑦ 土間の湿気遮断対策（ポリフィルム敷き&コンクリート流し込み、若しくは砂利敷き詰めなど）をするよりも、通気をきちんとさせる方が防腐効果大であろうと推測できる。
- ⑧ 後述するように（写真10、11参照；東側から西側に向けて吸湿状況が増大している）、屋外の地面からの水分、湿気をブロック製基礎が吸湿して、その水分が基礎の木材に伝播し、通気環境の悪い環境下で黴が発生し、その黴が増殖していく過程が律速しているであろうと推定できる。
- ⑨ 乾燥の目的として、剥がした屋内床下並びに屋外北側均した後、試しに消石灰を地面に散布した。



07：屋内北西側の2坪相当床板を撤去+根太仮置+消石灰散布



08：調査作業を終えて、仮の床板で覆う



09：松本さんが、屋内作業をじっと眺めている、横は新設の排水溝



10：屋外北側の基礎部分の吸湿レベル変化が一目瞭然、東側が低く、西方向に高く



1 1 : 屋外北側雪囲い撤去後盛土削除+消石灰散布⇒基礎部分  
吸湿レベルの変化が歴然としている



1 2 : 屋外北側排水溝の深堀



1 3 : 屋外北側から東側へ排水溝を掘る



1 4 : 丸太ベンチ前に排水溝を掘る



1 5 : 造林小屋と小屋の間にある脱輪しやすい排水溝に小屋側盛土を削って埋める、  
親跡さんと松本さんが大活躍⇒四駆車方向変更可能に、更に林道までの小径を佐木さんが草刈



16：屋外玄関前の敷地の傾斜付けをして排水をし易く、安藤さん、榎本さん、鈴木が大活躍



17：屋外正面玄関側、南側の斜面作りと雨水溜まりの排水促進の工夫



18：屋外正面玄関側の排水溝が水溜まり状態⇒溝の斜面化と小屋側盛土

### 今後の方向性

小屋委員長の安藤さんが、この1週間前に五八木荘主人兼苗名小屋所有者である、岡田さんを訪ねて林道から小屋への小径、造林小屋、苗名小屋周辺のインフラ整備について相談し、更に地元の建築業の中電産業さんに基礎部分の交換工事の見積を依頼してきた。

そこで、インフラ整備は了解を取り付け、見積のための小屋現地調査にお盆最中にも拘らず中電産業さんが来られた。中電産業さんには過去に無水洗・便所の改造工事を依頼した経緯があり、80万円掛かった。

今回の床張替え工事は自前で可能かどうかの判断が必要となり、7月の小屋行事（黒姫山、妙高山登山）に合わせて、床板一部剥がしての基礎の傷み具合の事前調査を実施した後を受けての、二回目の調査であった。

写真でも分かるような痛んだ箇所は、三年間に分けて実施してきた南側斜め壁から縦壁への改造工事と併せた、水周りや調理台の改造、明り取りなど自前での工事とは、どうも異質なものであると感じる。

鉄筋工事で良く使う天井を建造する際のコンパネ支え支柱など専門道具を具備していない我々、外壁対象ではなく、建屋内部の基礎部分（アンカーボルト使用、荷重の掛かる4本柱を弄くる）に手を入れることが必須であり、従来の部分補修、改造とは根本的に異なる。

**小屋は建築後42年経過したものの、屋根は10年保証の葺き替えを実施済みであり、基礎部分の更新をすれば更に数十年は、いや30年、40年はもつと考えられる、つまり建て替えや新築は不要であると認識することが肝要である。**その前提に立って以下の進め方を考えてゆきたい。

- ① 近々に施工実績のある地元の中電産業さんからの見積結果を十分に吟味し、交渉して、どの位で仕上がるのか先ず待つことにする。我々の概算見積は50万円～60万円とみる。
- ② 次回役員会にてこれらの調査報告をし、方針を決める。役員会の決定事項をOB総会に報告し了解を頂く。（床張替えは自前でやることを前提とした予算枠の確保など）
- ③ 9月の三連休には、空気漏れの続く井戸からの配管の交換、今回の排水溝の効能向上のためのU字溝の埋設などを予定。（工事車両が小屋前まで進入できるように今回、障害物を除去した積りである）

2010年8月16日 文責・鈴木